要約

日本人の自己卑下バイアスをデフォルト戦略としてとらえる鈴木・山岸（2004）の解釈の妥当性を検討するため，札幌市に在住の成人約 100 名を対象とする実験を行った。異なる二つの課題を実施後，その課題の成績について尋ね（デフォルト条件），さらにその数ヶ月後に，現金のボーナス――自分の成績に関する判断が正確な場合に追加の報酬が得られる――について教示した上で，課題の成績についてもう一度尋ねた（ボーナス条件）。その結果，1）参加者の半数以上が自身の成績を「平均より下」であると判断する自己卑下傾向は，成績を判断する理由が不明確なデフォルト条件においてのみ観察されること，そして，2）ひとたび自分の成績を判断する理由が現金のボーナスであることを明示されれば，デフォルト条件において観察された自己卑下傾向が完全に消失することが明らかにされた。参加者内要因のデザインを用いた場合でも鈴木・山岸（2004）の知見が再現されることを明確に示す本研究の結果は，彼らの解釈の妥当性を示している。

キーワード：　自己卑下傾向，自己卑下バイアス，デフォルト戦略，文化差，文化への制度アプローチ